

武蔵野日曜聖書講筈 復活節

キリストの復活と我らの生活

——ルカ伝第24章13～53節——

1995年4月16日

小池辰雄

日本の希望の根源者 キリストに在っては強者 ただキリストに圧倒されているだけ 十字架
で贖いきられたあとに必ず聖霊がくる 十字架・復活・聖霊降臨 感謝と讚美 祈り

【ルカ24】

13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオと
いう村に往きつつ、14 凡て有りし事どもを互に語りあう。15 語りかつ論じあう
程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。16 されど彼らの目遮えられて、イ
エスたるを認むること能わず。17 イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ
互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、18 その一人な
るクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て、独り
此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』19 イエス言い給う『如何なる事ぞ』
答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業に
も言にも能力ある預言者なりしに、20 祭司長ら及び我が司らは、死罪に定め
んとて之を付し遂に十字架につけたり。21 我らはイスラエルを贖うべき者は、
この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日ははや三
日めなるが、22 なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝風
く墓に往きたるに、23 屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは
活き給うと告げたりと言う。24 我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、
正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』25 イエス言い給う『あ
あ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信するに心鈍き者よ。26 キリ
ストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』27 かくてモ
ーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き
示したもう。28 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、
29 強いて止めて言う『我らと共に留まれ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』
乃ち留らんとて入りたもう。30 共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて
祝し、擘きて与え給えば、31 彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエ
ス見えずなり給う。32 かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説



明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』³³かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵一人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述べ。 ³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち「『平安なんじらに在れ』と言ひ」給う。 ³⁷かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思ひしに、 ³⁸イエス言ひ給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、 ³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴⁰「斯く言ひて手と足を示し給う」⁴¹かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言ひたまう『此処に何か食物あるか』⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

⁴⁴また言ひ給う『これらの事は我が汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』⁴⁵ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言ひ給う、⁴⁶『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、⁴⁷且その名によりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。 ⁴⁸汝らは此等のことの証人なり。 ⁴⁹視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』

⁵⁰遂にイエス彼らをベタニヤに連れゆき、手を挙げて之を祝したもう。 ⁵¹祝する間に、彼らを離れ「天に挙げられ」給う。 ⁵²彼ら「之を拜し」大なる歡喜をもてエルサレムに帰り、⁵³常に宮に在りて、神を讚めいたり。

●日本の希望の根拠者

賀川豊彦さんは大変なひとだ。賀川さんみたいな人は私の育った無教会にはいません。これは本当のどん底から実践した人です。福音は本当に生活そのもので受けとっていかなければいけない。ところが、私の育った無教会は研究が多い。無教会信仰は今思うと、インテリ的な研究が多くて観念的でした。そうではなくて、聖書は本当に生活そのもので読まなければいけません。聖書を生きなければいけないということをしみじみと思えます。

キリストは十字架の三日目に――十字架に架かったその日を数えて三日目に――甦えられた。だから、十字架をぬきにして復活を考えるわけにはいかない。キリストは人を助け救い、そして、そのあげくが十字架だということですから、こんな不合理なことは世の中にないわけです。キリストはユダヤ教をアウフヘーベンした。ユダヤ教の本当の根本精神をちゃんと受けとつて、それを乗り越えられた。そして、新しい道を開かれた。本当の意味の新興



宗教なんだ。

この頃、「オウム真理教」とかいう不愉快な事態があつて、日本中を騒がせているのはとんでもない。何であんなものに共感する奴がいるかと思う。素晴らしいキリスト道と仏道を本当に持たないで、他の新興宗教にゴタゴタするなんて、日本人は全く情けない。二大宗教家のキリストとお釈迦さんをすっかり学ばないで何やっているかと思えます。

大体、日本の教育家も本当の意味における宗教を持たない。仏道にしろキリスト道にしろ、それが教育者の魂の根底にないようでは、教育はできないわけです。ヨーロッパでもアメリカでも、キリスト教は生活の中に伝統的にしみこんでいる。だから、やはり違ふんです。日本人は大体、無宗教です。そういう意味で、我々、福音に接した者はどういう人に対しても遠慮なくこの福音を伝えなければならぬ。あなた方一人一人は伝道者です。どうぞ、一対一の伝道を大いにお続けいただきたいと思えます。日本の将来の希望は、福音を身につけている人に一番かかっている。

「我は日本の柱なり」

と日蓮が言いましたが、さすがは日蓮は仏教の世界を身につけていました。日蓮は太平洋を臨みながら靈感にうたれた人ですが、太平洋は我々にとつては大きな池である。皆さんもしよいよ雄大な気持をもって進んでください。日本人は太平洋を持つているんだ。キリスト者は本当の世界宗教を持つている我々だということです。あなた方は非常にお一人一人が伝道の使命を持つている。遠慮なくやっていたいただきたいと思えます。学校の教育も福音が土台になっていなければ、教育なんか本当はありはしない。日本の希望は我々にかかっている。本当に福音を身につけている人は、どこの教会の方でも日本の希望の根源者です。クリスチャンは大いにその点でもつと自覚を強くしないといけないと思えます。

●キリストに在っては強者

「生きるは戦いなり」

とは内村鑑三先生の好きな言葉です。生きることは戦うことである。自己との戦いまた諸々の悪との戦い、偽りに対する戦いです。

“Der Starke ist am mächtigsten allein.”

(デア・シュタルケ・イスト・アム・メツヒティツヒステン・アライン)

「強者は独り在るときに最も強し」

という言葉がある。これはシラーの『ウィルヘルムテル』の中に出てくる言葉です。我々クリスチャンはこの「強者」なんです。キリストにある者は強い。それは独りある時に最も強い。

「千万人といえども我行かん」

という孔子の言葉もありましたが、皆さん一人びとりがキリストにあつてサタンを相手に



戦える。マルチン・ルターがそういう気持でいました。独り在るときに最も強い。我々は弱者ではない、強者なんだ。けれども、我々はひとりでは弱い。キリストがなかったら弱くてダメだ。しかし、キリストに在っては我々は強者なんだ。男でも女でも、老人でも若い人でも、同じことです。

「キリストに在る」

と言うときには、それは一体何ですか。十字架で私たちは贖われきつている。相対的人間小池がどうであろうと、そんなことは問題ではない。その小池という存在そのものはキリストにもう贖われきつている。無条件にあなた方一人びとりは救われているんです。生活がどうのこうののではない。その無条件的な救いをいただいている。それを本当に冥想してごらん下さい。だから、私は「無」という。私が無い。無というのは「我が無い」ということ、無我です。無というのは「自分は何でもない」ということ。

最大の無者はキリストだったんです。キリストは父なる神の他に何も無い。

「われ何ごとも為しあたわず」

と、ヨハネ伝ではつきり言っただけです。

「私は何もできない。ただ父が私の中にきて、為させている。父から力が来ている」と。

●ただキリストに圧倒されているだけ

キリストは神さまに圧倒されて生きていたひとです。我々はキリストに圧倒されて生きていなければダメなんだ。信じているのではない。

「私はキリストを信じています」

なんて、そんななまやさしい表現ではダメです。

「私は信じてても何もいない。私は何も無い。ただキリストに圧倒されているだけです」

ということ。この世界は凄い。あなた方は、キリストに圧倒されながら生きてくださいよ。太陽の光に圧倒されて輝いている。そういうわけです。

「こつち側から信ずるの、信じないの。できるの、できないの」

ということではない。だから、キリストは

「われ何ごとも為しあたわず」

と仰った。

「父がさせているんだ。父の力がきているんだ、父の光が来ているんだ、生命がきて

ているんだ、愛がきているんだ」

というわけです。…(異言)…

イエスさまに圧倒されて生きています、これは何とも表現できませんね。こつちから



信じているのではない。

「信仰がまだ薄いのが、厚いのが」

と、何言っているか。

「信仰なんかいらん、ただ圧倒されている」

ということ。太陽の光は何ものよりも凄い光をもっているのと同じことです。キリストに在ると、キリストの力と愛と生命に圧倒される。もうそれを冥想するだけで力がきて、踊る宗教ではないけれども、踊りたくなるくらいです。

この調子では、私は百歳を突破しますよ。今、91歳だけでも。年齢なんか問題でない。終りなき生涯です。どんな青年にも負けないよ。私はなにも虚勢をはっているのではない。楽しくてしょうがない。いかなる環境にあっても、

「主さまー」

と言ってキリストを讃美するほかはない。私は讃美歌なんだ。皆さんも、讃美歌にならないくてはね。キリスト讃美、神讃美が我々の生活です。どんな状況に入っても、

「アーメン、ハレルヤー」

です。

「どうも調子が悪い」

なんて、そんな相対的なことでゴタゴタする必要はひとつもない。行き詰まることはちよつともない。行き詰まりを知らないことになる。

「キリストに圧倒されて生きています。信じていません」

これが私の告白です。

「こつち側から信ずるの信じないと何言っているか、ただ圧倒されているだけだ。

楽しくてしょうがない、楽でしょうがない、力が来てしょうがない」

と。皆さんはそういう気合でいらつしやると思います。ヒルティが、

「やむをえないという生き方が本当の生き方だ」

と言ったが、ヒルティさんの言うとおりです。やむにやまれずという力で生きていたのが西郷隆盛です。西郷南洲は素晴らしい人だ。私は本当に尊敬します。彼は深い愛の人です。小さなものも本当にいたわる人です。

● 十字架で贖いきられたあとに必ず聖霊がくる

「復活」というと、何か息が吹き返したようなことを感ずるような言葉だけれども、そうではない。キリストの地上における生命は何の力ですか。もちろん、聖霊です。この聖霊の力をキリストはいただいているから凄かった。十字架・聖霊なくしては、キリスト者は本ものでない。十字架に贖いきられて、そのあとには必ず聖霊がくる。

「祈って待っている。お前たちに約束のものを送るから」



と仰った。「約束のもの」とは聖霊のことです。キリストはもうそのことをちゃんと約束しておられた。

「お前たちをただ棄てておかないぞ。そのうちに聖霊のキリストとしてお前たちと一緒に歩くぞ」

と。ルカ伝24章は素晴らしいところだ。二人の者がエルサレムから出かけて行った。そして、もう一人、知らないひとと一緒に歩いてきた。それは復活のキリストです。

13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、14 凡て有りし事どもを互に語りあう。15 語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。16 されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わず。17 イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、18 その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て、独り此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』19 イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業にも言にも能力ある預言者なりしに、20 祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。21 我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日ははや三日めなるが、22 なお我等のうち或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝風く墓に往きたるに、23 屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。24 我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』25 イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信するに心鈍き者よ。26 キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』27 かくてモ―セ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。28 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、29 強いて止めて言う『我らと共に留まれ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。30 共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、31 彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えざるに給う。

甦りのキリストが、霊的なキリストが、自在にこのようにやつてらつしやる。パツと姿を消された。

32 かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』33 かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、34 『主は実に甦えりて、シ



モンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち「『平安なんじらに在れ』³⁷と云い」給う。³⁷かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思いに、³⁸イエス云い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴⁰「斯く言いて手と足を示し給う」⁴¹かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

甦りのキリストが魚を食べたよ。ウソではないよ、これは本当のことだ。普通の肉体の人間みたいに食べるんだ。普通の聖書学者は、これは物語だと言つて、このところを信じない。物語ではない。冗談じゃない。これは本当のことなんだ。一番本当の意味で、本当の内容的に聖書を読めるのは我々です。普通の人は文字づらばかり読んでいます。文字の奥の世界が本当に食べられていない…(異言)…私は言葉にならない。そういう凄い世界だからね。

⁴⁴また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言いし所なり』

旧約の預言は全部、キリストに集中している。

⁴⁵ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、⁴⁶『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、⁴⁷且その名によりて罪の赦を得さす悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。⁴⁸汝らは此等のことの証人なり。⁴⁹視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』⁵⁰遂にイエス彼らをベタニヤに連れゆき、手を挙げて之を祝したもう。⁵¹祝する間に、彼らを離れ「天に挙げられ」給う。⁵²彼ら「之を拝し」大なる歡喜をもてエルサレムに帰り、⁵³常に宮に在りて、神を讚めいたり。

● 十字架・復活・聖霊降臨

そういうキリストの生命と力と光と愛に圧倒されるわけです。

「私はキリストに圧倒されて生きています」

と、あなた方は言わなければダメだよ、

「信じています」

なんて言わないで。「信ずるの信じないの」という、こちら側の話ではないということなんです。私もこれだけの福音を受けたら、不滅なものを、或る一つのものを書くまでは向こう側



に行くわけにいかない。ヒルティも言った、

「死ぬのではない。この世の生活が終わって、隣の部屋に行くように、別の世界に行くんだ」

と。彼はそのような楽しいことを言っている。私が向こう側に行ったら、

「小池先生はどうとう死んだ」

なんて絶対に言っただけはいかんで。死なないんだから。この烈々たる福音の世界は、死ぬの死なないのと、そんなことではないですから。私がこの世を去ったら、

「小池先生、ハレルヤ、万歳！」

と言っただけです。似たようなことを言ったのはイギリスのグラッドストーンです、

「讚美歌を歌って喜んでくれ」

と。ミルトンも似たようなことを言った。

聖書は読むのではなくて、食べなくてははいかん。文字の奥の現実を身につけなければ。意味がどうだこうだと、意味の詮索ではない。聖書は食べなければ。聖言を食らう。御業をくらう。そうしたら、ご飯は要らなくなる。

「今日は絶食しても、さっぱりお腹がすかないね」

と、そういうことになりますから。

断食は何か鍛錬するためにするのではない。キリストを食べるために、キリストを飲むために断食する。水だけは飲む。渴いてはいかん。

十字架・復活・聖霊降臨、この三つはバラバラにしたらダメです。キリストは十字架に架かって贖罪をなさった。その後で何をされるかというのと、

「祈って待っている、約束のものを与えるぞ」

というのは聖霊のこと、

「聖霊を受けとれ」

ということ。十字架のあとでキリストは復活なさった。我々はこの復活の生命をいただかなければダメです。そうすると、すぐまた、聖霊が臨んでくる。

「聖霊をもたざる者はキリスト者にあらず」

とパウロがローマ書で言っている。

「然れど神の御霊みたまなんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。」(ロマ8:9)

と。キリストの御霊、聖霊の無い者はキリストに属する者にあらずという。十字架・復活のキリストを受けとるのは最後は聖霊です。十字架・復活・聖霊と、こうくるわけです。復活のキリストは我々に聖霊のキリストとして臨んでくださって、聖霊の力でもって圧倒する。聖霊は素晴らしい内容を持っている。生命も智慧も力も愛も光も、みなこの聖霊の中にはいつている。だから、聖霊に圧倒される。そして、楽しくてしょうがない。力が来



てしようがない。不思議な智慧がわいてくる。何を読んでも、本当のその文字の奥の世界を読んでしまう。非常に創造的なんです。

●感謝と讚美

霊体を持ちながら、キリストはものを食べるんだから、復活のキリストというのは大変なものだ。私はキリストを信じてない。圧倒されて生きてます。

「私は信じてなんかいません。圧倒されて生きているだけのはなしです。信ずるの信じないのと同じくこつち側のはなしではない」

と、そういうことがはつきり言えなければダメなんです。

「私の信仰はまだ薄いから、もつと厚くしなければ」

なんて、何を言っているか。「自分の信仰」なんか問題にしないでください。そんなものは何もありませんということ。蛍光灯は太陽の光の前には何ものでもない。

我々は太陽の光と空気と水でもって生きている。大自然は素晴らしい。時々、山へ行ったり海へ行ったりして、大自然の素晴らしさを身につけなければ。普通の人が何でもないと思うところに驚嘆しなければダメです。

圧倒されなければダメなんです、キリストに圧倒されて生きていないと。

「私の信仰はまだです」

なんて何を言っているか。

「信仰なんかよせ、圧倒されろ」

と。私は乱暴な言い方をしますが、これは本当なんです。だから、何と言おうか、説明できないね、しゃべっているだけ余計なんだ。あなた方、私の言葉になんか捕らわれてはダメだよ、

「先生は何をしゃべっているか。もつと奥の世界を分かっていますよ」

「はいはい、その通りです」

というわけ。

讚美歌を歌うことは非常に大事なことです。大いに歌いたいと思います。神・キリストを讚美しなくては。我々の生活そのものが、どんな状況にあっても讚美歌でなければダメです、讚美していなければ。感謝と讚美です。いろいろなことに遇ったら、それだけありがとうございますということ。

日本はおかしな国だね。

「教育者はまず聖書をしっかり読め、それでなくて教育ができるか」

と言いたい。聖書は世界の大事な最大の書である。もつたいぶっているからダメなんだ。

「来たれ！」

「どこに来るんですか？」



「聖書に來たれ」

と。あなた方の親しい人で聖書を読まない人には大いに言ってくださいよ。大体、欧米の文学の根底は全部、聖書です。聖書なくして欧米の文学も哲学もありえない。それだけ聖書は根底なんです。

何と云ったって、歴史的にヨーロッパやアメリカはその点ではいい。日本にはそれだけの聖書の歴史がない。あつても、日本のキリスト教がダメだから、そういう歴史が形成されていかない。「聖書研究会」なんて何言っているか。研究なんかいるか。全くいやになつてしまうね。あなた方は、聖書を身をもって生きている人間で、証し人である。

「我は聖書の証人である」

という自覚をもって進んでください。

「十字架・復活・聖霊」

この三つの事態は離してはダメです。本当に復活したら、必ず聖霊がくる。

「御霊なきものはキリスト者にあらず」

とパウロがローマ書8章ではつきり言っている。

● 祈り

祈ります。私たちの贖主にして、また復活の生命をもって自らを示し、聖霊をもって私たちに臨んでくださる主さま。復活の霊的な現実の、またしかも霊的でありながらお魚までも食べたもうところの驚くべき主さま。今日は、私たちにこの生命をもって、愛をもって、光をもって臨んでくださって、私たちはあなたに圧倒されて、この集会を今まで持つことができ感謝いたします。私たちはあなたの存在そのものに圧倒されて、また、あなたの存在そのものを私たちの中に入れていただいて、あなたが入っていたいて、私たちはいかなる現実においても絶対にへこたれることなしに本当の強者として進めさせられていることを、この驚くべきご恩恵を感謝いたします。

どうぞ、兄弟姉妹たち一人びとりにいよいよあなたが現実となつてくださいますように願いたてまつります。この復活の記念すべき集会を霊的な現実をもって送らしていただきまして、ありがとうございます。兄弟姉妹たち一人びとりの全存在の中にある感謝と讚美と祈りをあなたが親しく聞いてくださり、そして、本当にいよいよあなたの僕、婢らしく進ましてくださることを信じて、御名を讚え奉ります。この甦りの日の驚くべきあなたの復活の事態を本当に全存在をもって受けとらせてくださってありがとうございます。兄弟姉妹たちの感謝と讚美と祈りと共に、主イエス・キリストの御名にあつて献げ奉る。アーメン。

